

ヨルダン川に浸る 2012年6月10日

エディー・サントロ、アシェル・イントレーター

去年イスラエル自然保護協会は、エリコのヨルダン川対岸にバプテスマの場所とハセル・アル・イエフードという自然保護区を開設しました。このアラビア語の名称はヨシュアの時代の奇跡の渡りについて言及した「ユダヤ人の川渡り」を意味しています。この場所はイエシュア(イエスさま)が洗礼者ヨハネによって洗礼を受けたキリスト教の伝統的な由来のある場所でもあるのです。

これら2つの歴史的出来事の重要性は、お互いに関連があるということです。イエシュアは荒野で40日間の断食をすることにより、モーセとともにユダヤ民族が40年間荒野を彷徨ったことの意義を「完了」させており、同じようにヨシュアとともにユダヤ人たちが、この川を渡った意味を、彼がヨルダン川の同じところで浸されることにより、「完成」されたのです(マタイ3章15章)。イエシュアとイスラエルの民の歴史の契約的および霊的な統一には、とても深い意味があるのです。(マタイ2章15節)

先週、私たちはハセル・アル・イエフードに来ました。その砂漠の炎天下の中、私たちのエルサレム集会からの新しい信者3人に、イエシュアの死と復活に預かる洗礼を授ける喜びを得ました。その他にも数人が川に浸され、彼らの人生を改めて主に捧げました。

それぞれが色々な経験を通してきていますが、なんといっても素晴らしいのは神の愛が敵の力に勝っている事実でしょう。最後の2人が水から上がり、神さまの恵みに感動し喜びで満たされていた時に、1羽の白い鳩が飛んできて私たちの上を輪を描いて飛んでいたのです(マタイ3章16節)。

規則の例外

選ばれて3千年、聖なる民(出エジプト記19章6節)、だけどその救い主を知らずに、私たちユダヤ人は何となく特別な召命があると感じているようです。それに加えて、私たちは神さまからのシナイ山で律法の道徳的基準を与えられました。しかしそれが達成されることはありません(エレミヤ31章32節)。

ひょっとするとこれらの背景から、イスラエルのユダヤ人たちは、私自身が「規則の例外」とよんでいる不思議な心理的症候群に陥っている傾向があります。それは例えばこのようなものです。――規則って大切。誰でも規則に従わなければならない。誰か規則に従わない人がいるなら、その人は罰せられ、非難されるべき。しかし、私は特別、私は格別な召命を受けているから、私は、そんな規則からは例外として扱われ、適用されないのです。

[まあ、こういった心理的機能障害は、どのような民族や宗教的背景をもつ人にも現れるものかも知

れませんが。☺]

イザヤ 13 章と終わりの時代

イエシュアの再臨は、新約聖書の預言の重要なもののひとつです。それはまた旧約のヘブライ人預言者たちにとっても肝心なものなのですが、別の名前で呼ばれているため、見落とされがちです。つまり「大いなる恐るべき YHVH(注)の日」です。これら2つの名前をもう一度関連づけることにより、私たちは古い約束と新しい約束のあいだの預言の一貫性についてより良くわかり、終わりの時における出来事に対してよりはっきりとした理解が形づくられてくると思います。

(訳注: イエホヴァーやヤーヴェーと発音される神の御名。ですが、みだりに神の名をとらえてはならないというご命令ゆえに、神聖四文字(ヘブライ語のヨッド、ヘイ、ヴァヴ、ヘイ)だけで表記する事が多い。)

- 黙示録では、主の再臨について、おもに御使いたちと悪霊どもとの霊的な闘いというイメージを通して語られます(黙示録 12 章 7 節、19 章 11 節)。
- ヨエル書では、祈りと、悔い改めとリバイバルが再臨に先立って起こるという観点で描かれています(ヨエル 1 章 14 節、2 章 12 節、28 節)。
- ゼカリヤ書は、おもに世界の国々がエルサレムに対して起こす戦争の視点を通して、終わりの時の闘いがどのようなものであるかを解説しています(ゼカリヤ 12 章 2 節、9 節 14 章 2~3 節、12 節)。
- エゼキエル書はイスラエルの復興(エゼキエル 36 章)、死人の甦り(エゼキエル 37 章)、ゴグとマゴグの大規模な戦争(エゼキエル 38~39 章)、千年紀の神殿と御国(エゼキエル 40~48 章)について語っています。
- イエシュアはオリーブ山での対話で、イザヤ、エレミヤ、ダニエル、ゼカリヤから自在に引用して語っています(マタイ 24 章 29~31 節)。

イザヤ 13 章は終末預言として解釈されがちですが、主の再臨についても述べられています。

イザヤ 13 章 6 節——泣きわめけ。主の日は近い。全能者から破壊が来る。

イザヤ 13 章 9 節——見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。

イザヤ 13 章 13 節——…万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に、

イザヤ 13 章の視点は、「バビロン」の軍隊の滅んで行くさまを説明していますが、それは正に黙示録 17~18 章で描写している「バビロン」と殆ど同じなのです。イザヤはバベルに対する預言的重荷

を綴っています(13章1節)。**[ヘブライ語では、バベルとバビロンは同じなのです。]**彼は、空がどのように暗くなり(13章10節)、この世がその行なってきた悪の結果として裁かれるかを述べています。

ひどい戦争が起こりたくさんの人々が死にます(13章15節)。人々はそれぞれの国へ帰って行き(13章14節)、ソドムとゴモラの時のように火が注がれます(13章19節)。これらの出来事は、イスラエルが霊的にも物質的にもひとつの国として復興できたと同時に起こるのです。

イザヤ14章1節——まことに、主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選び、彼らを自分たちの土地にいこわせる。在留異国人[や改宗者、客]も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる[接ぎ木される]。

ローマ11章に平行して、この節はイスラエルの回復だけを語っているわけではなく、世の国々の多くのグループの人がイスラエルの霊的パートナーとなることも解説しています。これこそ終わりの時代に教会がイスラエルの霊的なパートナーシップとなり、そのオリーブの木、イスラエルに接ぎ木されること以外の何ものでもありません(ローマ11章17節~21)。

このイスラエルの召命への回復と、その他の国の教会とのパートナーシップ関係が、イエシュアの再臨の時におけるサタンの究極的な敗北へと繋がって行くものなのです。**イザヤ14章12節、15節——暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。**